

新島 襄の言葉

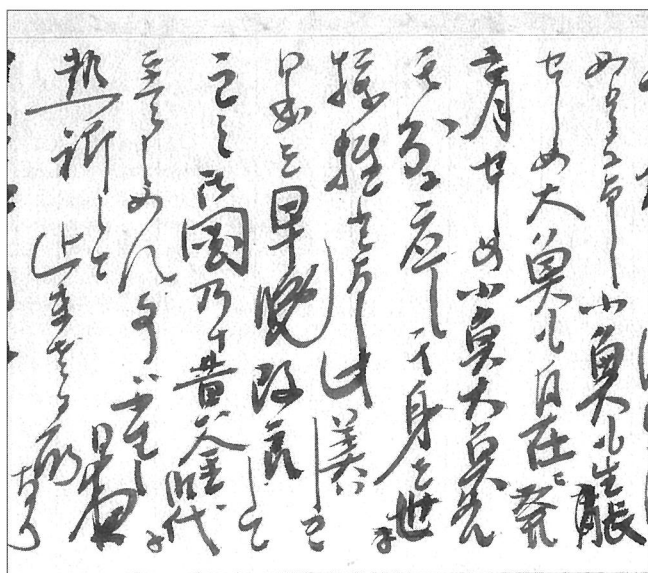
相模 浩史（中学校教諭）

1889（明治22）年12月30日、東京から大磯に転地療養した新島から、当時の在校生であつた横田安止に宛てた手紙の一節である。

横田安止は、晩年の新島襄からもつとも信頼された生徒の一人である。横田も新島を尊敬し、二人の間には単なる師弟関係を超えた深い交わりがあつたことであろう。あの「良心の全身に充滿したる丈夫」という同志社の精神を象徴する言葉も、新島から横田に送られた手紙の一節に記されている。

「小魚をも」の直前には、新島の愛した中国古典の一文から引いて「深山大沢之如くになし」とある。「大沢」に理想の学園を思い描き、小魚も大魚もその理想の学園で個性を十分に生かしながら成長していくことを新島は念願していたのである。

「人一人は大切なり」と語つた新島の思想の根幹には、目の前にいる「人」に向けられている慈愛の眼差しがある。紛争の絶えない地上の現実に目を向けたとき、この新島の言葉から「狼は小羊と共に宿り」（イザヤ書）の精神を支えているヒューマニズムを読み取ることができるのではないか。平和を作り出す担い手を世に遣わすことのできる学園同志社を未来につないでいくことが、私たちの責務である。



小魚も生育せしめ、大魚も自在ニ發育せしめ、小魚大魚各其分に應じ、其身を世に犠牲となし、此美ハしき日本を早晚改良して主乃御國、乃チ黄金時代に至らしめん事ハ小生乃日夜熱祈して止まざる所なり